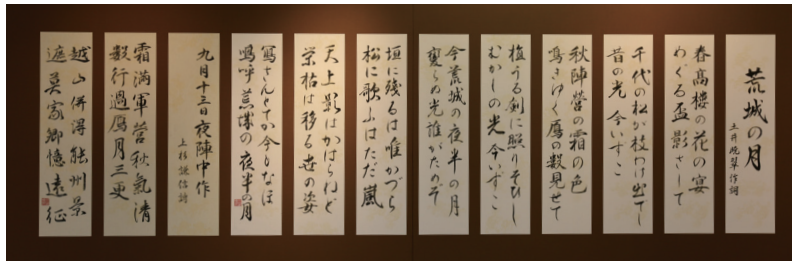


2015 江戸川大学オープンカレッジ書道講座

絵画のような作品たち

4月24日から5月6日まで西武・そごう柏店の連絡通路(通称・おしやれギャラリー)で、江戸川大学のオープンカレッジ書道講座の受講生による作品展が開催された。
(写真: 石原健太郎、大塚桜 文章: 田中啓史)



水曜日クラスの共同作品

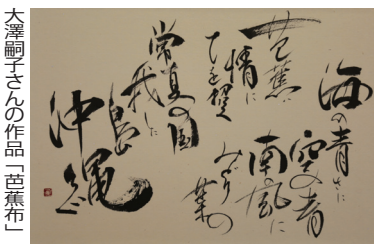
書道講座は、年2回展示会を行っている。1回目は、そごうでの展示。2回目は、駒木祭での展示だ。
「今回の展示作品は、クラスごとに、テーマがことなるんです」と、受講生の遠藤博司さんが教えてくれた。

遠藤さんと安藤弘さんが学ぶ水曜日の「古典に学ぶ美しい書道」

クラスでは、ある一つの曲を、一節ずつ二人ひとりが、リレー形式で書きひとつの作品を作り上げた。上側の余白の幅だけ決めてあと

はリレーで書いた。ひとりで書いたときには、創意的なパワーが鑑賞する人を圧倒する。
大澤嗣子さん、三浦なおみさんが受講する火曜日朝の「日常に生かす美しい書道」クラスでは、自分の思い出すでは、自分の思い出す

の曲を書いた。
大澤さんは、沖縄民謡の「芭蕉布」を書いた。芭蕉は、沖繩の特産でバナナの葉に似た植物。芭蕉布は、その芭蕉から採った繊維を織り込んだ布のこと。「元々沖縄出身だったので、選びました。芭蕉布には3つの青があるけれど、それぞれ違う書体で書き、違いを出してみました。そういうのも見てもらいたい」と話してくれた。



大澤嗣子さんの作品「芭蕉布」

「少年時代」の一節を書いた、三浦さんは「ふつうの字体のままでは面白くないので、少し懐かしい字体に挑戦しました」。

個性的な書をじっくりとみてみると、やがて文字が観ている人の心のなかで動きたし、まるで絵画のように自由なフォルムと色彩さえ生み出す。
これらの作品にみられるように書の表現領域を広げることが指導しているのが、書道講座の講師、村竹恵子先生だ。
「村竹先生は、字を書かせるのが本当にうまい。ふと気付くと私は筆を握って作品作りに励んでしまつて無理がなく個性を伸ばしてくれる」と受講生たちはうれしそうに表情を浮かべた。
そんな村竹先生の作品は、地下1階にあった。そこには、村竹先生の薦めで参加した、江戸川大学職員の書道作品も飾ってあった。
こちらのテーマは、自分の名前もしくは好きな漢字の一字を好きに表現すること。様々な漢字が並び、各々がその表現に工夫を凝らしていた。どちらかというと書というより絵画を見てい

るような気になせる作品が多かった。
村竹先生を中心に、江戸川大学で書道文化の輪が広がっていることを感じた。

学生記者募集!

学生記者クラブは、学内外のイベントや、部活動、サークル活動などを取材します。

記事は「江戸川大学学生新聞」として発行するだけでなく、ウェブにもアップして世界に向けて発信していくプロジェクトです。

「Journalism」とは「発見や感動を相手に伝えること」。あなたもジャーナリストになろう!

N棟1階の受付にお気軽に声をかけてください。連絡先: TEL(04-7152-9908)E-mail(kouhou@edogawa-u.ac.jp) 広報課